



菊地 凜 (きくち りん) 大和田小 6年生

作品名:「愛、深き淵より。」を読んで

図 書:愛、深き淵より。

私が星野富弘さんのことを知ったのは、修学旅行の事前学習で、星野富弘美術館のことを調べることになったのがきっかけです。口に筆をくわえて文や絵を描く人がいる、私はそんな人がいることを全く知りませんでした。富弘さんのことをインターネットで調べているうちに、もっともっといろいろな作品、出来事について知りたくなりました。修学旅行で実際に新富弘美術館に行く事ができた時は、まず、全部が丸い部屋だったことに驚きました。シャボン玉をイメージした丸い部屋が大小三十三もあり、部屋のすき間には詩画に登場する草花が咲いているそうです。もちろん、バリアフリーで、富弘さんも身障者なので、身障者にやさしい造りになっているんだなぁと思いました。一つ一つの作品をじっくり見ていると、富弘さんが作品にこめた、お母さんや病院の方への感謝やお礼の気持ちが伝わってきました。美術館へ行く前、校長先生が開いた俳句会の結果発表があり、六位だった私は、校長先生からポストカードをいただきました。それには、富弘さんの絵と詩が書いてあり、とても素敵でした。

花は自分の美しさを
知っているから
美しいのだろうか
知らないから
美しく咲ける
のだろうか

俳句で選ばれたことのうれしさと、このポストカードの優しく、でもどこか寂しく綴ってあるこの詩が、とても気に入りました。そして、私も少しだけ残っていたおこづかいで一枚ポストカードを買うことができました。

ねこやなぎを
割ってみた
中から宝石が
でてくる
ような気がして

かわいらしい素敵な詩だと思いました。そして、ねこやなぎを割ってみたくくなりました。私は富弘さんの詩や絵、そして、富弘さんが作品を作るまでの間のことを、

もっと知りたくなりました。そして本屋さんへ行き、「愛、深き淵より。」という富弘さんの生い立ちが書いてある本と、「種蒔きもせず」という詩画集を買いました。

富弘さんは、中学校の体育の先生になってたったの2ヶ月後、生徒の前で跳び箱をしている時、頭から落下し、肩から下が動かなくなってしまう重傷を負いました。入院中に色々な人との話やめぐりあわせにより、口で絵を描くことに希望を見つけた話です。

「下手でもいいじゃあないか。のろくてもいいじゃあないか。初めてつり輪にぶら下がった時だってなんもできなかったではないか…。」

私が強く心に残ったのがこの言葉です。これは富弘さんが初めて口で字を書いた時に、

「大好きな器械体操のように、基礎をたくさん練習していれば、気がついたら色々な技ができるようになった。だから、いつかは口でだってきっと美しい文字が書けるようになる！」

と思った時の言葉です。この言葉は富弘さんの人がらをよく表しています。富弘さんは、前向きで素直な心の広い人だと思います。私が富弘さんに魅力を感じたのは、自分にはない部分をたくさんもっていると思うからです。富弘さんは、口でたくさん絵や詩を描き、日本はもちろん、海外でも、多くの人々に親しまれています。それは、富弘さんがいつも、前向きな心を忘れず、努力しているからだだと思います。

これから先、私が落ちこんだり、悲しくなったりした時、きっと私は富弘さんのことを思い出し、お気に入りの詩や絵を見て、前に向かって歩こうと思います。